『アンリエット・ダングルテール伝』における人物評
－ラファイエット夫人の分析的視点をめぐって－

森本信子[1]

はじめに

17 世紀フランスの女性作家ラファイエット夫人は、現在もフランスのみならず日本でも広く読まれている『クレーヴの奥方』の著者として有名だが、他に『モンパンシェ公爵夫人』『タンド伯爵夫人』『ザイード』の 3 つの小説を残している[2]。17 世紀後半の古典主義を牽引した文人たちや、華やかなサロン文化の中心人物たちとの交流を通して磨かれた文筆の才能は、周囲から高く評価されていた[3]。ルイ 14 世の王弟妃であったアンリエット・ダングルテールが、自らの恋愛経験を書きとめるようラファイエット夫人に依頼したのも、その才能を見込んだからであり、『アンリエット・ダングルテール伝』[4]としてまとめられた。

その執筆は 1660 年代中頃から始まっており、大半が『クレーヴの奥方』執筆以前だと考えられる。ラファイエット夫人は『クレーヴの奥方』出版直後の 1678 年 4 月 13 日付の手紙の中で、この作品は「宮廷の人々やその生活の様子を完全に模したものだと思います。小説じみたところは何一つなく、小説というより、まさに記録です」[5]と述べている。この時点でほとんど執筆を終えていた『アンリエット・ダングルテール伝』が、『クレーヴの奥方』に何らかの影響を与えたと考えることは不可能ではない。この可能性を視野に入れながら、本論考では、『アンリエット・ダングルテール伝』における人物評の特徴を分析し、アンリエット及び宮廷社会を見つめるラファイエット夫人の眼差しがいかなるものであったかを考察する。

1　『アンリエット・ダングルテール伝』の構成と執筆時期

この書物はラファイエット夫人の死後、1720 年にオランダで初めて出版された。これは、17 世紀の写本をより読みやすく、史実をより中立に伝えるものへと一部修正を加えたものだった[6]。本論考で扱う 2014 年出版のプレイヤード版は、写本 8 種のうち現在参照可能な最も古い *Nîmes* 版を可能な限り忠実に再現したものである。それ故、接続詞や代名詞の多用という筆者の癖もそのままに、

---

[1] **薬学部第 4 英語研究室**

[2] 『モンパンシェ公爵夫人』は匿名で『ザイード』はスグレの名で生前に、また『タンド伯爵夫人』は匿名で没後出版されたが、現在ではいずれもラファイエット夫人の著作とされている。

[3] 例えば、ボワローはラファイエット夫人について「最も才気あふれる、最も良いフランス語を書くフランス女性」と述べている。*Œuvres Complètes*, éd. Camille Esmein-Sarrazin, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2014, p.XII. 日本語訳での引用は拙訳による。

[4] *Ibid.*, pp.713-775. この全集には『アンリエット・ダングルテールの死の記録』という表題で収録されているが、本論考では生前の記録にも注目することから従来の表題を採用した。

[5] *Ibid.*, p.989. ここで「記録」と訳出したのは Mémoire という単語である。著者による私的な回想録を指す言葉だが、客観的事実が著者の主観によって色付けされるという点で、歴史的記録と小説の中間的位置にある。ここでラファイエット夫人は、客観的事実の記述という側面を強調していると考えられることから、「記録」とした。

[6] *Ibid.*, pp.1391-1401.

客観的記述の中に突然筆者が1人称で介入する箇所や、2人称を挿入することで読者の共感を喚起する箇所など、ラファイエット夫人の私的な視点が随所に現れる。

章分けはされていないが、内容から4つの部分に分けられる。1つ目は、ごく短い序文で、ラファイエット夫人が記録を書くことになった事情が書かれている。2つ目は、宮廷の主だった人物たちの人物像とルイ14世の恋愛の記述、3つ目がアンリエット・ダングルテールの恋愛経験談とそれに関連する事件の記述で、この2つの部分で約8割を占める。4つ目の最後の部分は、アンリエット・ダングルテールの臨終の数時間に関する簡潔だが詳細な記録である。

これら4つの部分の執筆時期について、序文を手掛かりに特定しておきたい。執筆の時期と背景は人物像の描出に影響するからである。

序文は、アンリエットの母が夫の処刑後にフランスに帰国して居住したシャイヨ修道院での、修道女アンジェリックとの友情の記述から始まる。ラファイエット夫人は、アンジェリックが義妹にあたるため、「よくこの修道院を訪れ、そこで若いイングランドの王女をみかけ、彼女の才気と人柄の良さに魅了され」[7]たのである。するとすぐ、「死ぬまで私に心を寄せよくしてくださった」[8]との文が続き、これを書いている現在、アンリエットがすでに亡くなっていることが明かされる。アンリエットが亡くなったのは1670年6月だが、この序文が書かれているのはさらにもっと後のことである。「1669年に王がシャンボール城に行った折、彼女はサン・クルーに滞在し、今のサヴォワ公爵夫人を出産した」[9]と書かれており、1669年生まれの娘がサヴォワ公と結婚したのが1684年であるから、この「今」は1684年以降のはずである。アンリエットの死から少なくとも14年以上経ってから、ラファイエット夫人はようやく序文を付け加えたのである。

第2及び第3の部分の執筆時期は序文の中で明確に示されている。「1664年にギッシュ伯爵が追放された」[10]際に、ギッシュ伯爵との恋愛談を書き留めたら「素敵なお話になるでしょう。あなたは書くのが上手だから、書いてくださいな。記録の題材をたっぷり提供しますから」[11]とのアンリエットの申し出に、ラファイエット夫人が賛同し伝記の執筆が始まったのである。アンリエットが夜語った内容をラファイエット夫人が書き起こし翌朝見せるというやり方で進められ、数年の中断をはさんで、1669年のサン・クルーでのアンリエットの出産時に再開された。

1670年、イングランドからの帰国後数日でアンリエットが突然の死を迎えたことが序文の最後に記される。臨終の一部始終を見届けたラファイエット夫人は「あの方ほど愛すべき姫君は決して現れないだろう。その姫君が亡くなるのを見て、私は感じられる限りの苦しみを味わった」[12]のである。さらに「姫君の死に立ち会った私は、その記録を続ける気にはなれないので、私が証人となった臨終の様子を記すにとどめた」[13]の一文から、悲しみのあまり生前の部分が未完成のまま放置され、第4の臨終の記録が独立して書かれたことがわかる。この部分はその写実性や切迫感から、

[7] *Ibid.*, p.716.
[8] *Ibid.*, p.716.
[9] *Ibid.*, p.716.
[10] *Ibid.*, p.716.
[11] *Ibid.*, p.716.
[12] *Ibid.*, p.717.
[13] *Ibid.*, p.717.

1670 年の死の直後に書かれたとされている[14]。ここでの筆致は他の部分とは全く異質なもので、「証人」としての正確な証言に徹しようという確固たる意志に支えられた文章となっている。

以上のように、4 つの部分からなる『アンリエット・ダングルテール伝』は、まず 1664 年ごろと 1669 年にアンリエットの宮廷生活に関連する第 2、第 3 の部分がアンリエットからの聞き書きで書かれ、1670 年にアンリエットの臨終に関する第 4 の部分が書かれ、1684 年以降に第 1 の序文の部分が付け足されたものということになる。ラファイエット夫人単独の視点によって書かれた第 1 と第 4 の部分がアンリエットの生の記録を挟むこの構造が、文体も長さも不揃いである各部分を書物として統合する役割を果たしている。

2　人物評の特徴

次に、ラファイエット夫人の視点が明確に表れる人物評について検討する。序文の中で「真実をありのままに伝えながら不愉快なものにならないように」[15]腐心したことに触れられているが、ラファイエット夫人はどのように手腕を発揮したのだろうか。

ルイ 14 世の弟で、アンリエット・ダングルテールの夫となるフィリップ・ドルレアンの人物像は客観的事実に称賛と皮肉を絶妙に配置した典型的なものだ。まず、彼は美男ではあったが、それは「王子というより、王妃にふさわしい」[16]ものだったと書かれ、女装趣味がほのめかされる。女性と過ごすことが多いのは、女性が恋愛対象だからではなく、自慢の女装をひけらかすためである。自尊心が強すぎて自分しか愛せないため、女性を愛すことはできない。「優しく、親切で、礼儀正しい」[17]という敬意を表す表現は、主に女性に対して使われている表現でもあり、男性的な豪胆さの欠如を暗示する。女装趣味に興じ政治能力を欠いた、嫉妬心が強いフィリップ・ドルレアンのゆがんだ自尊心が印象付けられる書き方で、全体に揶揄の調子が付与されている。直接的な非難の言葉は避けながらも、ラファイエット夫人のフィリップ・ドルレアンへの眼差しは冷徹で批判的なものである。

次に、後にアンリエットの情人となる、ギッシュ伯爵の人物評を検討する。「このプリンスの心を燃え立たせる奇跡は、世のどんな女性も起こせなかった」[18]という、フィリップ・ドルレアンの同性愛趣味をほのめかす文の直後に、お気に入りの一人としてギッシュ伯爵が言及される。「最も美しく、容姿端麗の若者で、人柄に優れ、色好みで、大胆さと勇敢さを備え、偉大さと気力にあふれていた。美点が多いゆえの虚栄心とふるまいの節々に現れる傲慢さが少しばかり長所を陰らせていた。それでも、彼と肩を並べる男性は宮廷にいなかった」[19]と評されている。フィリップ・ドルレアンと対照的に、ギッシュ伯爵には男性としての魅力も備わっている。しかしラファイエット夫人は、「虚栄心」や「傲慢」という欠点を指摘することも忘れてはいない。ギッシュ伯爵がやがて宮廷から追放されることを知っているラファイエット夫人が、その遠因を人格的欠点に見ていることが分

[14] *Ibid.*, p.1376.
[15] *Ibid.*, p.716.
[16] *Ibid.*, p.720.
[17] *Ibid.*, p.720.
[18] *Ibid.*, p.729.
[19] *Ibid.*, p.729

かる箇所である。

女性に対する人物評を見ておきたい。ルイ 14 世の恋人だったマリー・マンシーニは、読書好きで後に自ら回想録を書くほど文学的素養のあった人物だと言われているが、ラファイエット夫人の評価は驚くほど低い。「マンシーニ嬢は美貌とは程遠く、人柄に何の魅力もないうえ、たいそうな才気はあってもそれは魅力的というよりも、大胆で頑なで激しく奔放で、およそ礼儀に適っているとは言えなかった」[20]という辛辣な批評をしている。直接的表現を慎み洗練された言語を好むサロン文化育ちのラファイエット夫人の視点からは、マリー・マンシーニの「才気」には受け入れがたい粗野さがあったのだ。ルイ 14 世との恋愛関係を引き裂かれたマリー・マンシーニが、スペイン王女マリー・テレーズとの結婚に対して激しい怒りを抱く様子も描かれる。マリー・マンシーニの激情に対して、ラファイエット夫人の眼差しは冷ややかなものだ。「時間と、不在と理性がついに彼女への誓いを忘れさせた。（中略）王は同じ愛情を彼女に抱くことはもうなかった」[21]という簡潔な文章には、マリー・マンシーニの激情を相対化する、ラファイエット夫人特有の冷めた恋愛観が表れている。一方で、王妃マリー・テレーズは美人でないとしながらも、「気がやさしく穏やか」[22]な人柄であり、「野心的なたくらみなど思いもつかない」[23]純朴さでルイ 14 世をひたすら愛し、嫉妬に耐える人物として描かれる。この 2 人の対比的な人物評から、ラファイエット夫人が、あからさまな感情の発露に批判的で、静かな忍耐心を評価していることがわかる。

ルイ 14 世のもう一人の愛人、ラ・ヴァリエール嬢についてはどう書かれているだろうか。アンリエット付きの女官である彼女は、「大変な美人で、とても気立てがやさしくうぶで、家柄は凡庸」[24]だと書かれている。「凡庸」という言葉は、ルイ 14 世との恋愛を隠し通せないのは「凡庸な能力」[25]の持ち主だからだとする箇所でも使われており、ラ・ヴァリエール嬢の評価の中核をなすものと考えられる。別の箇所では「ラ・ヴァリエール嬢は、これほどの寵愛を受けていれば他の女性なら手に入れられる優遇を得るに足る才気を持ち合わせておらず、ただ王に愛され王を愛することしか考えていなかった」[26]と書かれる。「凡庸」は「才気」の欠如なのである。またここで指摘されている愛情の純粋さが、次の愛人の座を狙うソワソン夫人たちの陰謀を招き、ルイ 14 世の女性関係に対する絶望と嫉妬につながっていく。陰謀や駆け引きが渦巻く宮廷において、寵愛を利用する才気を持たない女性は、宮廷では異質な存在である。史実によれば、ラ・ヴァリエール嬢は 30 歳で自ら宮廷を去り修道院に引退する。ラファイエット夫人は、ラ・ヴァリエール嬢の異質性を冷静に分析しながら、宮廷における純愛の不可能性を確信していったのではないだろうか。この冷めた眼差しは『クレーヴの奥方』の恋愛観にも表れるものである。

以上、多くの人物評の中からいくつかを取り上げたが、「才気」と「礼儀」がラファイエット夫人の重要な判断基準となっている。「才気」という言葉は、状況分析力、判断力、社交能力などを広く

[20] *Ibid.*, p.723.
[21] *Ibid.*, p.724-425.
[22] *Ibid.*, p.718.
[23] *Ibid.*, p.720.
[24] *Ibid.*, p.733.
[25] *Ibid.*, p.739.
[26] *Ibid.*, p.744.

指している。批判の矛先は、限度のない自己顕示や激しい感情の発露といった「礼儀」からの逸脱に向けられる。また、マリー・テレーズやラ・ヴァリエール嬢の場合のように、愛情の純粋さに対する悲観的な眼差しも、ラファイエット夫人の特徴となっている。

3　アンリエット・ダングルテールの人物像とその変貌

さて、この書物の中心であるアンリエット・ダングルテールはどのように描かれているだろうか。

序文で確認したように、アンリエットには幼少の頃から「才気と人柄の良さ」が備わり、不世出の最も愛すべき姫君だったと、ラファイエット夫人は懐古していた。ここでは、経験談を記録した第 2、第 3 の部分を詳しく検討し、その人物評を探っていく。

フィリップ・ドルレアンとの結婚が提案されたのはアンリエットに「類まれな魅力があり、王母が大変気に入っていた」[27]からだという。アンリエットには「何よりも人に好かれる天性のものがあり、気品と魅力といったものが人柄、ふるまい、才気にあふれ、これほど等しく女性にも男性にも愛される姫君はいなかった」[28]と絶賛している。結婚によってフランス宮廷に現れたとたん、「その魅力、礼儀正しさ、才気に驚かない者はいなかった。（中略）彼女のことばかりが話題に上るようになり、だれもが熱心に称賛した」[29]と書き、人物判断の基準である「才気」と「礼儀」を理想的に体現した女性として描いている。この人格の美化は最後まで変わらない。ラファイエット夫人の観察眼はアンリエットの過ちも見逃さないが、人格的本質への批判は加えない。これは、この記録がアンリエットとの共同執筆であるための当然の帰結であるだけでなく、筆記者ラファイエット夫人がいかに彼女を高く評価し、その尊厳を守ろうとしていたかの表れだと言えるだろう。

次に、アンリエットに対しても容赦なく向けられる、ラファイエット夫人の冷めた観察眼について見ていこう。例えばルイ 14 世との親密な関係について、「義理の妹として気に入ってもらいたいと彼女は考えていたが、違った意味でのお気に入りになっていたと私は思うし、義理の兄としてだけ愛していると考えていたが、実際のところはおそらくもう少し深い愛情を感じていたと私は思う」[30]と書き、「私は思う」という 1 人称表現を繰り返して、自身の分析を挿入している。アンリエットが自覚していない恋愛感情をラファイエット夫人は鋭く見抜いていたのである。この分析と対比的に、アンリエットの自己認識では義理の兄と妹という関係を逸脱しておらず、アンリエットの本来的な無邪気さを暗示していることにも注意したい。アンリエットの「人柄の良さ」の記述を貫こうとする姿勢の一端がここにも表れている。

ギッシュ伯爵との恋愛関係に関しても、ラファイエット夫人が独自の分析を加えた箇所がいくつかある。ギッシュ伯爵の誘惑を受け入れる様子について「よく考えもせずにお遊びだと受け止めていた。彼女自身より世間のほうがよくわかっていた。」[31]と書かれている。思慮に欠ける行動に走るアンリエットの未熟さを指摘しているのはラファイエット夫人である。また、ギッシュ伯爵との噂が広まり義母や夫の反感が強まっていく中、「王母に対して、またムッシュウに対してさえもするべ

[27] *Ibid.*, p.727.
[28] *Ibid.*, p.727.
[29] *Ibid.*, p.730.
[30] *Ibid.*, p.732.
[31] *Ibid.*, p.735.

き多くのことをマダムご自身がなさらない」[32]という一文では、アンリエットの周囲への配慮の欠如が非難の一因だと分析している。さらにはっきりとアンリエットの未熟さを指摘しているのが、「彼女は大変若く、経験不足によって若さゆえの過ちをさらに増やしてしまった」[33]という文である。ラファイエット夫人の見方によれば、ギッシュ伯爵との関係は「若さゆえの過ち」である。別の箇所では、ギッシュ伯爵との関係についてアンリエットは「先のことを全く考えず、小説じみたおふざけだと考えていた」[34]とし、ギッシュ伯爵を女装して忍び込ませたりする悪ふざけを楽しむアンリエットについて、真剣な恋愛感情はなかったと分析している。このように、ラファイエット夫人はアンリエットの未熟さや軽率さに関する自らの分析を繰り返し介入させる。これがかえってギッシュ伯爵との関係におけるアンリエットの無垢さを際立たせることにつながっている。若さゆえに小説の出来事のような恋愛に無邪気に興じていただけであり、深刻な不倫関係にのめりこんだのではないことが強調される。アンリエットの人格をあくまで擁護しようとするラファイエット夫人の意図がその分析にも表れていると言えるだろう。

アンリエットをめぐるもう一人の重要人物、ヴァルド侯爵との関係がアンリエットの人間的成長に大きな役割を果たした、とラファイエット夫人は見ている。「常軌を逸したヴァルド侯爵の悪だくみ」[35]に翻弄される中で、怒りや絶望といった感情も経験するアンリエットは、小説的な享楽に夢中の未熟な人間から、思慮を伴う成熟した女性へと変貌していく。その変貌を象徴する言葉が、この記録の前半では使われなかった「真実」という言葉である。ヴァルド侯爵のたくらみに陥れられたギッシュ侯爵には「真実を知ってもらいたいし、裏切られ、誰も逃れられない罠にはめられた自分は、真実以外のどんな正当化も望まない」[36]という考えを持つようになる。ギッシュ伯爵に対する、「真実だけが救ってくれるのだから、ありのままを誠実に告白する」[37]ようにとの助言の、「真実」と「告白」という言葉こそアンリエットがたどり着いた境地であり、際限のない画策に苦しめられないためには、見かけに惑わされず、隠された真実を見極めなくてはならないことに気づいたのである。「常に真実を語ることでこの迷路から脱した」[38]という文には、アンリエットの変貌を要約するラファイエット夫人の声が響く。アンリエットはもはや「危険なものが素敵に見える年ごろではない」[39]と断言する。泣き落としにかかるヴァルド侯爵に対して取る毅然とした態度や、宮廷を去るギッシュ伯爵との完全な離別の決意を記録するラファイエット夫人は、成熟した人間としての判断力がアンリエットに芽生えたことを高く評価しているのである。

このようなアンリエットの晩年の姿は、序文に書かれたラファイエット夫人の義妹、アンジェリックと呼応する。彼女はルイ 13 世の求愛を決然として拒否し修道女になった。情事の対象として男性に翻弄されることを拒絶して自己を貫こうとした女性として、アンジェリックの逸話は晩年のアンリエットと響きあう。嫉妬や憎しみ、画策や陰謀に満ちた宮廷社会では、各人が常に破滅の危

[32] *Ibid.*, p.735.「ムッシュウ」とは王弟、「マダム」とはその妻を指す当時の慣用表現。
[33] *Ibid.*, p.738.
[34] *Ibid.*, p.741.
[35] *Ibid.*, p.762.
[36] *Ibid.*, p.761.
[37] *Ibid.*, p.764.
[38] *Ibid.*, p.762.
[39] *Ibid.*, p.765.

機にさらされ、情報と感情の網の目に絡み取られると、関係性の渦に巻き込まれ自己を見失う。その中で主体を確立していこうとした女性たちに、ラファイエット夫人は敬意の眼差しを向けているのである。

4　アンリエット・ダングルテールの死

最後の部分は、アンリエットの突然の死の詳細な記述であり、この書物の中だけでなく、ラファイエット夫人の言説全体の中でも異彩を放っている。「苦痛に満ちた調子で、ああおなかが痛い！我慢できない！と言って真っ赤になったかと思うと、すぐ真っ青になり、皆驚いた」[40]というように、刻一刻と病状が悪化する緊迫した様子と、筆者や周囲の動揺と混乱が詳細に記録される。「彼女は叫び続け、七転八倒していた」[41]といった肉体に関する直接的な記述は、小説においては死に関して抽象的にしか描かないラファイエット夫人においてきわめて例外的なことだ。

一方で、アンリエットの人格の高潔さを徹底的に擁護しようとする姿勢は変わらない。これまで称賛してきたアンリエットの魅力を再確認させる。26 歳という若さや美貌が、イングランドとの同盟案締結という政治的大役を果たした満足感と相まって、以前にもまして「魅力とやさしさ」[42]が備わるようになったと書かれる。病室には「皆の泣き声しか聞こえなかった」[43]ほど周囲が悲しむ様子が書かれ、皆に愛される人物としてアンリエットが描かれている[44]。

史実によれば、このころ、アンリエットと夫フィリップ・ドルレアンの関係は悪化していたが、この点には軽く触れるにとどめ、アンリエットの生活は「最も気持ちの良い状態」[45]だったとしている。これは、彼女の死が、病気や苦悩といった因果関係を全く持たないものであることを強調する意図の表れと考えられる[46]。ラファイエット夫人の小説である『モンパンシェ侯爵夫人』や『タンド伯爵夫人』におけるヒロインの死は、自らの行為に対する懲罰として描かれている。アンリエットの死についてラファイエット夫人は、これらの死とは全く異質のものとして描こうとしているのである。アンリエットの死は、何の因果も持たない、完全に突発的な偶然として提示されている。毒を盛られたというアンリエットの主張も「困った思い込み」[47]として退けられる。アンリエットの死は、夫婦関係にも外交関係にも全く無関係に生起した、究極の偶然である、という点に焦点が置かれている。

---

[40] *Ibid.*, p.767.
[41] *Ibid.*, pp.767-768.
[42] *Ibid.*, p.765.
[43] *Ibid.*, p.768.
[44] モンパンシェ嬢の回想録では、「少なくとも王妃がそばにいるときは、皆泣き始めた」「部屋でおしゃべりしたり、出たり入ったり、笑っている者もいた」と皮肉な調子で書かれ、周囲がそれほど衝撃を受けていない様子が記録されている。*Mémoires de la Grande Mademoiselle*, Édition présentée et annotée par Bernard Quilliet, Mercure de France, 2005, p.295.
[45] *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.766.
[46] モンパンシェ嬢の回想録では、アンリエットが病気がちであったとされ、その死が全く予期せぬものとして書かれてはいない、との指摘もある。Lise Charles, «Une morte habillée, à qui l'on aurait mis du rouge. La mort de la princesse d'Angleterre racontée par Mme de Lafayette et Mlle de Montpensier», dans *Littérature Classique*, 2012/2 (No78), pp.127-142.
[47] *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.768.

アンリエット自身は、このような死にどう対峙したと書かれているだろうか。刻々と病状が悪化する中、激しい腹痛に苦しむアンリエットは「世界で最も辛抱強い人間だと思う」[48]と述べ、また「もはや生きることではなく、辛抱強く痛みに耐えることのみ考えていた」[49]と分析し、アンリエットの「辛抱強さ」が特筆される。さらに、迫りくる自らの死を「他人事であるかのように」[50]とらえる、アンリエットの理性を失わない態度も言及される。もはやできる治療がないことは医者より自分がわかっていると口にするアンリエットは、「他人事を話しているかのように落ち着いた、穏やかな様子」[51]だったという。死の間際、周囲に声をかける際にも、「驚くほどやさしい調子」[52]や「持ち前の礼儀正しさ」[53]が失われることなく、静かに臨終を迎える。突然襲った死を前にして、混乱と絶望に身を任せるのではなく、理性的に状況をとらえ静かに受容しようとするアンリエットの態度の崇高さが繰り返し記述される。その後に続く最後の文は「唇が数回けいれんした後、明け方の2時半に亡くなったが、それは具合が悪くなり始めて9時間後のことだった」という、主観的表現を全く排除した事実のみを伝えるものである。26歳という若さでの予期せぬ死に際して、最後まで品位を失わず穏やかに死を受け入れたアンリエットの最期を余計な言葉で汚すまいとする、記録者としてのラファイエット夫人の、誰よりも「愛すべき姫君」への敬意の表れではないだろうか。

おわりに

以上、ラファイエット夫人の人物評と眼差しについてその特徴を検討した。ラファイエット夫人は、観察力や判断力によって真実を求める能力としての「才気」と、節度ある行動を保つ「礼儀」という観点から人物像を冷静に分析していた。表面的な事実の列挙ではなく、隠された心の動きを洞察したところにラファイエット夫人ならではの特色がある。アンリエット・ダングルテールに対しても、ラファイエット夫人はその美点と未熟さ、さらに成熟の様子を同じく冷静な眼差しで見つめていた。アンリエットの要請で始まったこの伝記は、ラファイエット夫人の分析的視点が加わることで、アンリエットの成長の記録となったのである。写実性の強い臨終の記録にも、アンリエットの死の受容における内面的な崇高さへの視線が随所に現れ、その余韻の中でアンリエットの成長物語が完結する。

ラファイエット夫人は『クレーヴの奥方』は「記録」だと評したが、この『アンリエット・ダングルテール伝』という記録が『クレーヴの奥方』のモデルだったとまでは断言できないにしても、いくつかの類似点は明らかだ。冷静に人物を観察し分析する眼差し、恋愛がらみの陰謀の描出、悲観的な恋愛観といった特徴は、ラファイエット夫人の小説と共通するものである。突出した魅力、真実の希求、若年での高潔な死というアンリエットの人物像も、『クレーヴの奥方』のヒロインと重なってくる。アンリエットの記憶がやがて、『クレーヴの奥方』において永遠に生き続けることになる、と言うことはできそうである。

---

[48] *Ibid.*, p.767.
[49] *Ibid.*, p.769.
[50] *Ibid.*, p.769.
[51] *Ibid.*, p.770.
[52] *Ibid.*, p.774.
[53] *Ibid.*, p.775.